

平成27年度秋田大学研究者海外支援事業帰国報告書

所属・職名： 教育文化学部 人間文化講座 准教授
氏名： 大西 洋一
派遣期間： 2016年3月28日～2016年8月10日（136日）
派遣研究機関名： レディング大学 英文学科（英国）
研究課題： 20世紀「北イングランド」演劇における地域産業と労働者階級の表象に関する研究

○研究概要

本研究は、英国内の「北イングランド」という地域に焦点を当て、その特色ある演劇伝統を地域産業と労働者階級の表象の考察を通じて検討することにより、英国演劇を多角的に捉えようとする試みである。以下では、その中でも二つの時期を取り上げて研究成果を簡単に記したい。

まず、北イングランド演劇を考察する上で重要な、いわば「地方演劇」の出発点である1900年代「マンチェスター派 (the Manchester school)」の時代である。19世紀末から始まったとされる「英国近代劇」において「マンチェスター派」演劇が脚光を浴びた背景には、産業革命の中心地域としてのランカシャー (Lancashire) とヨークシャー (Yorkshire) の社会的重要性がある。それは演劇史においては“mill-girl drama”（「女工」演劇）の伝統と密接な関係があり、ホーニマン女史 (Miss Horniman) による「レパートリー演劇」という形式での地方演劇活動においては、常套的な北イングランドの演劇の人物像やプロットを形作るきっかけとなっていた。当時の「北」の演劇の定番は、「過酷な社会的現実」を「情緒豊かな喜劇」として描くものであり、そこでは“soft lad”（気弱で頼りないが、女性の力を借りて成功する男性）や“Lancashire lass”（意志が強く自立したたくましい女性）が生き生きと活躍したのだ。

マンチェスター派 (the Manchester school) の代表的劇作家としては、アラン・モンクハウス (Alan Monckhouse, 1858-1936)、スタンリー・ホートン (Stanley Houghton, 1881-1913)、ハロルド・ブリッグハウス (Harold Brighouse, 1882-1958) がいる。彼らは「北部工業地帯」における「地方」の生活を、しばしば「家庭」に焦点を当てながら若い世代と古い世代の間の対立を探求しており、綿密な観察から生まれた共感とユーモアで労働者階級の生活を描写して人気が高かった。本研究において特に興味深かったのは、これらの「マンチェスター派」演劇と上記の“mill-girl drama”の伝統や、後世におけるテレビ／映画／演劇でのリバイバルとの関係である。たとえば、*Granada's Manchester Plays : Television Adaptations of Six Plays Recalling the Horniman Period at the Gaiety Theatre, Manchester* (Manchester UP, 1962) に見られるように、戦後の「怒れる若者たち」と呼ばれた地方の労働者階級を取り上げた演劇たちが世間を席卷し始めた時期に、「マンチェスター派」演劇も「再発見」されている。20世紀初頭の一時期を画す「演劇」群が、

それまでの演劇伝統やその後の「再発見」との関係でどのように演劇史の中に位置づけられるかを、今後さらに考察していきたい。

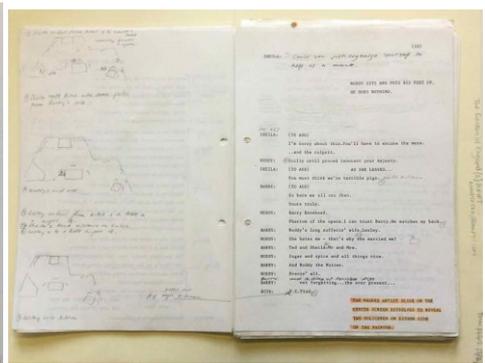
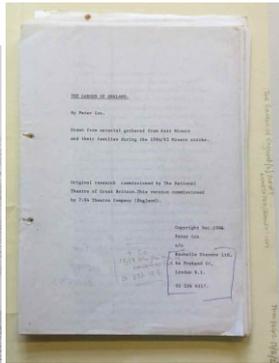
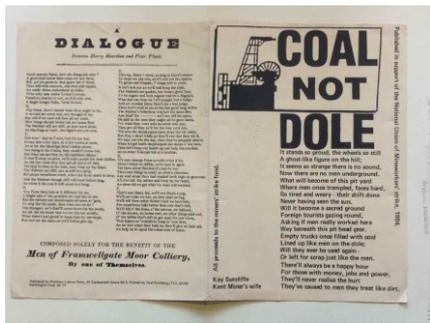
次に1980年代における「北イングランド」演劇についてである。この時代は「サッチャリズム」と呼ばれる、時の首相マーガレット・サッチャー (Margaret Thatcher, 1925-2013) が押し進めた様々な政策が社会を揺るがした時代である。サッチャー首相は、「大きな政府」から「小さな政府」へというスローガンのもと、これまでの労働党政権による手厚い社会保障・社会福祉制度を再編し、能力主義・個人主義・企業精神を称揚し、「市場原理」を導入して国有産業の民営化を進め、「規制緩和」による経済活性化を実現しようとしたのだ。それは当然ながら、北イングランドをはじめとした地方の労働者階級の生活にも重大な影響を及ぼした。その最たるものがサッチャー首相時代の歴史的な大事件である「最後の内乱 (the civil war)」とも呼ばれた「炭鉱ストライキ (the Miners' Strike)」(1984-85) である。

「炭坑ストライキ」とは、1984年3月6日、サッチャー首相の指示のもとイアン・マグレガー石炭庁総裁が年内に174抗のうち採算のとれない20抗を閉鎖し、約2万人解雇するという合理化計画案を公表したのを受け、全国鉱山労働者組合のアーサー・スカーギル委員長の指令で始まった全国ストライキのことである。(なお、このストライキは約一年間続くが、1985年3月5日、労働者側の敗北に終わった。)

英国映画『リトル・ダンサー (Billy Elliot)』(2000) でも描かれているこの「炭坑ストライキ」は戦後の英国史の転換点とも言える事件であり、今回詳しく調査を行うことによってその余波は当時の文化全体に幅広く浸透していることがわかった。とりわけ演劇界において「炭坑ストライキ」に関する同時代の反応は、たとえば“7:84 Theatre Company England”による *The Garden of England* (1984)、Ron Rose, *The Enemy Within* (1985)、Cordelia Ditton and Maggie Ford, *About Face* (1985)、Steven Downs, *Black Roses* (1987) など、様々な作品で取り上げられている。この中でもストライキの渦中で改変されて上演されていた *The Garden of England* (1984) は、ブレヒト的「叙事演劇 (epic theatre)」から現代の「逐語演劇 (verbatim theatre)」につながるような上演形態の変化を示しており、「炭坑ストライキ」を演劇人がどう受けとめたかを示してくれる作品となっており、今後詳しく検討していきたい。

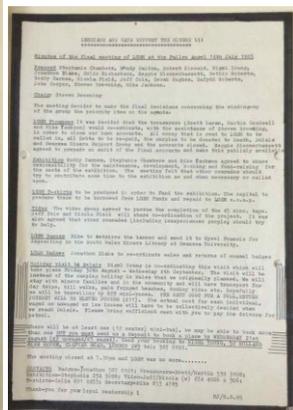
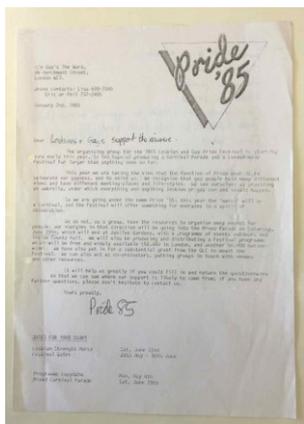


公演チラシと公演プログラム (*The Garden of England*)



戯曲執筆に使用した資料と未刊行の上演台本（*The Garden of England*）

さらに「炭鉱ストライキ」に関して重要なのが、いわば「文化」の側からの反応としてストライキを支持する「文化表象」が各分野に出現したことであり、そして、抗議する「人々」（労働者階級などの一般民衆）の中で「文化」と呼ばれる実践が生まれたことである。現在、この点に関して研究が進行しており、ストライキによって生まれた文化実践をカタログ的に収集し評価しているCraig Oldhamの*In Loving Memory of Work: A Visual Record of the UK Miners' Strike 1984-85* (2015)、「抗議」の文化や「ストライキ」表象を考察するSimon Popple らの*Digging the Seam: Popular Cultures of the 1984/5 Miners' Strike* (2012) やKaty Shaw の*Mining the Meaning: Cultural Representations of the 1984-5 UK Miners' Strike* (2012) など、労働者階級とストライキの文化を歴史的に考察する試みが行なわれている。このような学術界における再検討に加え、「炭坑ストライキ」30周年にあたり今なお演劇（Beth Steel, *Wonderland* (2014)）やダンス（Gary Clarke Company, *Coal* (2014)）や映画（*Pride* (2014)）などが立て続けに生まれている状況を鑑み、「炭坑ストライキ」をふたたび問い直す試みに今後取り組んでいきたいと考えている。



炭鉱ストライキ支援組織に関する資料（手紙、議事録、チラシ）

○研究滞在全般にわたる感想

ほぼ15年ぶりの英国長期滞在となった今回は、大学近くにフラット（アパート）を借りての単身生活となった。大学までは徒歩5分程度であり、英文学科や大学附属図書館に通うのには大変便利であった。またレディングという街自体も、ロンドンまで速い電車を使えば30分ほどで着くという大変便利な土地であった。



レディング大学入口



レディング大学 本部



担当教員 Peter Robinson 教授



英文学科フロア

本研究の資料収集のために、しばしばレディングを離れて遠方の様々な研究施設や博物館の文書庫や資料室も利用した。名前を挙げれば、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館附設演劇資料室および上演ビデオ視聴室（ロンドン）、国立劇場・文書庫（ロンドン）、英国映画協会・閲覧室（ロンドン）、労働者階級運動図書館（ソルフォード）、民衆史博物館・資料室（マンチェスター）、国立イングランド炭鉱博物館・資料室（ウェイクフィールド）などである。これらの施設の職員の方々には大変お世話になった。また、現在演劇界で活躍している北イングランドを代表する劇作家と実際に言葉をかわしたり、メールのやり取りをすることができたのも長期滞在ならではのことであった。ジョン・ゴドバー氏（およびジェイン・ソートン氏）とリチャード・ビーン氏にはここに記して感謝したい。（なお、これらの施設を訪問する際には当然旅費等がかかるわけだが、これらの研究調査にかかる費用や、大学に所属する際に必要となるbench fee（いわば

大学の在籍料であり、Eduroamなどのインターネットや図書館等の施設使用料にあたる) については研究計画を立てる際に予算として計上可能することも今後検討していただきたいと思う。)



V&A 博物館・演劇資料室



労働者階級運動図書館



民衆史博物館・資料室



国立イングランド炭鉱博物館・資料室

最後になるが、客員研究員として受け入れてくださった私の大学時代の恩師でもあるピーター・ロビンソン教授および滞在時の学科長であったアンドリュー・ナッシュ教授をはじめとするレディング大学英文学科の皆さん、そしてこのような貴重な機会を与えてくださった秋田大学の皆さんに心より感謝したい。